

サクラさん、遠慮なく咲いてね

気象庁の桜予報によれば、今年の桜は観測を始めてから最も早い開花となったという。季節は例年と同じように移り変わり、時期の前後はあっても春になればいろんな花が咲き人々の心を潤してくれる。だが今年は新型コロナウイルスの感染拡大で、社会は恐れおののきゆったりと観賞に浸るゆとりもあまりなかった。

そんな人間社会の雰囲気や桜が察知して川柳っ子に問いかけている句が朝日新聞の川柳欄に載っていた。☆（優秀句の印）がついていて私も「面白い！」と反応、さっそく同紙の声欄に投稿したが、時期が合わないのか、原稿の内容がいま一步なのか、ボツになった。でも自分としては内容がよく構成されていると思い（我田引水？）、せっかくなのでこのページで紹介させていただくことにしました。

投稿原稿は以下の通りです。

✚ 「こんな時咲いていいかと聞くサクラ」——3月14日付け本紙川柳欄の句です。先の見えないウイルス感染の広がり。休校でも行くところがない子どもたち。経済の落ち込みからくる生活の不安・・・社会は混沌としています。「サクラさん、こんな時だからどうぞ思いっきり咲いてください」。花の下での宴会は自粛されるでしょうが、ニッポンの春に桜がないと心が満たされないからです。

✚ 「世の中にたえて桜のなかりせば春のころはのどけからまし」。桜の季節だがいっつ咲くのだろうか？またいつ散ってしまうのだろうか？と気になって仕方がない。だから、もしこの世の中に桜がなかったらどんなに心は穏やかであろうかと、桜が好きでたまらないことを逆説的に詠んだ在原業平の句だよ、と学校で教わったのを思い出します。

✚ 海外では日米友好の象徴としてワシントン・ポトマック河畔の桜が有名ですが、私も現役時代パナマに駐在していたとき、乾季で暑い2月になると運河近くの通りがピンク色の花に染まったのを思い出します。亜熱帯の地に桜が咲くわけではないはずなのに、桜に似た数倍もある花びらが一斉に開くと桜並木みたいで、なぜか胸キュンとなり太平洋の向こうの日本に想いを寄せ感慨にふけたものでした。やっぱり、サクラは“ニッポンの魂であり心”ですから。



樹齢2000年とも言われる山梨県北杜市の神代桜（エドヒガンザクラ）＝同市のHPより